

学内での活動

次の各授業を担当した。メディア表現基礎 2、メディア表現特論 A、制作基礎 (情報工学)、制作演習 A、特別研究、プロジェクト実習 (場所・感覚・メディア、Augmented State Project、Assistive Technology Project)。一部授業の概要を以下に記す。

1 メディア表現特論 A

「環境」をキーワードにメディア表現・メディア技術を取り扱う授業。前年度同様、自身のこれまでの活動を紹介するとともに、フィールドワークとして体験実感できる機会を設けた (右図)。特に、技術の急速な発展が暴力的に価値観を変容させる予測を共有し、これについて議論を深めた。今期はフィールドの雑草を放置し、身近な自然の変貌を感じられる場とした。

2 プロジェクト実習：Assistive Technology プロジェクト (分担)

萌芽プロジェクトとして実施された。研究補助員が開発する教材補助装置についての意見交換と、支援学校での実践が活動の中心であった。コロナ禍をきっかけに開始した「気軽に情報交換できる場所」も引き続きほぼ毎週オンライン形式で開催、参加した。

3 プロジェクト実習：場所・感覚・メディア (分担)

当年度のフィールドワークとして、自宅の水田にて稲の収穫から脱穀、粳摺りまでの体験会を実施した (右図)。近代的な道具を使用せず、各自工夫してこれらを行った。同時に、効率化された道具の一つであるチェンソーを用いた丸太の加工も体験した。



フィールドワーク (メディア表現特論 A)
身体性を伴った体験を通じて、透明化する巨大な技術について考える。当年度は、フィールドの雑草を放置し、これを刈るところからの体験とした。



フィールドワーク (場所・感覚・メディア)
稲の収穫から粳摺りまでの体験。

個人の活動

農業を中心とした活動を継続的に行ないつつ、身の回りのものを修理したり、改変して使用することも継続している。当年は古い電気製品の修理依頼が複数あり、オーディオセットや工業用エアコンの簡単な修理を行った。自宅のコンバイン (稲収穫用の農業機械) では部品脱落・破損が見られたため、分解修理しているところである。ここ最近では、AI とともにより効率的に修理することが可能となっており、原因の推測や理解、対策の絞り込みなどにおいて、議論しながら進められる点は画期的である。同時に、入手困難な部品 (特定サイズの O リングや駆動ベルト、変換ノズルなど) をごく安価な 3D プリンタで問題ない精度にて出力できるなど、修理の観点からも大きな環境変化を感じる年であった。

その他の活動

- ・ 補助金 書面審査業務
- ・ 全国専門学科情報科研究協議会 (岐阜大会) 講師